

交遊抄

色とりどりの糸 堀 浩治

故郷の北九州市小倉の中学から早稲田大学まで同窓の築城則子さんと久々に再会したのは2003年。文学少女は染織家となり、昭和初期に途絶えた伝統工芸「小倉織」の再生を担っている。東京・銀座の和光ホールでの個展で、色とりどりの着物やしま模様様の帯に私の目はくぎ付けになった。

その時の強烈な印象が忘れられず、5年後、結婚30年の妻へのプレゼントに梅の枝で染めた薄紅色の着物を作ってもらった。茶色の枝から薄紅色が出てくるとは驚いたが、花がっぽみをつける1月の寒い頃は、花を咲かせる精を枝が宿しているのだという。受け取りで工房を訪ねると、えも言われぬ色の木染めの糸がずらりと並び「同じ木でも年や季節によって出る色が違う」と教わった。微妙な色のバランスで成り立つ小倉織の美しさ。彼女の飽くなき探究の姿勢は、自動車内装部品というものづくりを手掛ける私の手本となっている。

「堀くん、最近もちゃんと作ってる?」。最近では会うたびに、私の趣味であるバイオリン作りについて檄を飛ばしてくれる。芸術に打ち込めるのも、彼女のすてきな作品の存在があってこそ。小倉織の新作アイデアを練るために、今夜も地元の料亭「和楽」の女将と酒を酌み交わしている姿を想像し、にやっとしてしまう。(ほり・こう

じ 河西工業社長)